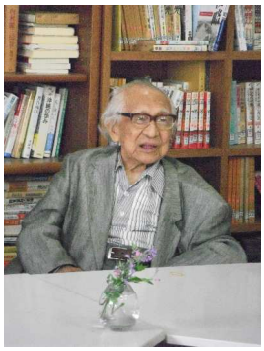
記念館会報　Vol. 16　　2016. 9. 28

NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

名誉顧問・むのたけじさん逝去



既に、報道でご承知の通り、当記念館の「名誉顧問」をお引き受け下さっていたむのたけじさんが、8 月 21 日早朝に亡くなられました（享年 101 歳）。皆様はむのさんについてはご承知と思いますので、記念館との関係を少しご報告致します。

むのさんには過日、記念館で講演をお願いしましたが、直前に「帯状疱疹」に罹りキャンセルになったことがありました。しかし、ご高齢のため再度のお願いは無理と諦めていました。その後、次男の武野大策さんから『父が記念館に行きたいと言っており、伺っても宜しいでしょうか？』とのご連絡を戴き勿論大歓迎ですと来館して戴きました。つまり、むのさんは過日の「キャンセル」を気にかけて下さっていたのです。　（2015 年 6 月記念館で）

しかし、その時は急でしたので理事やボランティアの皆さんとの「交流会」となりました。その時、むのさんは「ここが中日問題を考える埼玉の中心となって欲しい」と親子で会員登録をして下さいました。

そして昨年 6 月に改めて講演をお願いしました。「本来、何百人もの前でお話しするむのさんに、狭い記念館で 30 人ほどの集会で済みません、でも此処に来る皆さんは本気です！」とお伝えしたところ、快くお引き受け下さいました。この時の映像は記念館にあり何時でも視ることができます。この時には「死んでも会費を払うから運動を続けて欲しい」とまで評価下さり、僅かな謝礼は後日全額「カンパ」として振り込まれました。そこまで評価して下さるならと「名誉顧問」の就任をご相談した処、快くお引き受け下さいました。

敗戦の 8 月 15 日に「責任をとる」と朝日新聞社を辞めたむのさんは、その後、「辞めないで内部から改革すべきだった」とも言っておられました。朝日新聞社を退職後は故郷･横手で週刊新聞『たいまつ』を 30 年間発行されました。

記者時代に長女・ゆかりさんが疫痢に罹り病院に駆けつけましたが、何処の医者も軍医の「壮行会」で居らず、医師にも診てもらえず薬ももらえず亡くなり、それが反戦への「原点」の一つでもあったようです。むのんさん、有難う御座いました！心からご冥福をお祈り申しあげます。

目　　次

・「名誉顧問・むのたけじさん逝去」‥‥1
・「歩平先生逝去」‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥2
・「安川寿之輔さん記念館で講演」‥‥‥3
・「第 15 回・中帰連に学ぶ会」　‥‥‥‥4
・「中国友誼促進会」来館‥‥‥‥‥‥‥5
・「撫順戦犯管理所」来館　‥‥‥‥‥‥6
・「2016 年度総会」報告　‥‥‥‥‥‥‥7
・「ＣＣＴＶが来館取材」‥‥‥‥‥‥‥7
・「寄贈された書籍から」‥‥‥‥‥‥‥8
・「10 周年集会」予告　‥‥‥‥‥‥‥‥8

「歩平先生、安らかに！」

張宏波（「中帰連に学ぶ会」事務局）

（生前の歩平先生）

1990 年代を中心に中帰連の方々と親交のあった歩平先生が、去る 8 月 14 日に亡くなられました。まだ 68 歳という若さでした。昨年から癌のため闘病されていましたが、普段通りの生活を心掛けておられ、8 月末の国際会議にも出席を予定されていたほどでした。告別式に参列しましたので、簡単に御報告させて頂きます。

黒竜江省で過ごした青年時代に、旧日本軍が遺棄した毒ガス兵器の被害が現在進行形で続いており、被害者が増え続けている状況を目の当たりにされたことが、研究の出発点でした。現地で被害者を訪ね、聴き取り調査を重ねて被害の実態をまとめられたのが初期の重要なお仕事です。調査には、『季刊中帰連』創刊期の編集委員でもあった山邉悠喜子さん（ABC 企画委員会元副代表）が常に同行されていました。この研究の過程で、日本軍の史料などを読むために日本語を独学で習得され、後に通訳なしで講義をされるまでになりました。

1990 年代に入って中帰連の加害証言活動が最盛期を迎えた頃、「731 部隊展」等で毒ガス戦の実態を証言する中帰連会員と一緒になって、現在の被害状況を日本各地で伝えられました。

その後も、頻繁に来日され、中帰連会員の三尾豊さんや主に化学兵器の問題に取り組む ABC 企画の皆さんと一緒に、戦争被害や歴史認識の問題について講演や証言に取り組まれてきました。中帰連の活動とともに歩んでこられた代表的な中国人研究者といえます。

2004 年以降は中国社会科学院の近代史研究所長として活躍されました。小泉元首相の靖国参拝によって悪化した日中間の歴史認識問題の解決を図るべく「日中歴史共同研究」が開始されましたが、その中国側座長として国際的に奮闘されたことは広く知られる通りです。その頃、開館間もない当館も訪問されています。最近では、昨年 9 月に北京で開催された中国友誼促進会主催の国際シンポにも参加され、中帰連に関する部会で御報告をされました。

さて、その歩平先生ですが、私も今年 3 月には御自宅へお見舞いに伺っておりました。思った以上にお元気そうで安心していたのですが、8 月に入って急激に容態が悪化したとのことで、14 日早朝に御家族に見守られて息を引き取られたそうです。

18 日に八宝山で行われた告別式はお人柄を反映した簡素な形式でしたが、お勤め先の社会科学院をはじめ、黒竜江省など各地から多くの参列者が駆け付け（写真下）、その親交の広さを物語っていました。

韓国からも「日中韓共通教科書」の作成に一緒に取り組まれた 3 人の研究者が参列されていました。14 日の訃報を受け、8/15 が光復節のため 16 日になるまでビザ申請ができず、特急扱いで発行してもらって翌 17 日に飛行機に乗られたそうです。

日本からは、同じく「3 カ国教科書」で御一緒された斎藤一晴さんが参列されたほか、駐中国大使および「日中歴史共同研究」の日本側座長だった北岡伸一氏らが参列し、御遺族に挨拶されていました。また、当記念館や「受け継ぐ会」のほか、「ABC 企画委員会」

（「葬儀」の会場）

や「731 部隊・細菌戦資料センター」「重慶大爆撃の被害者と連帯する会」などから弔い花輪や弔電が届けられていました。

最後に、韓国からの参列者が今後の取り組みについて憂慮されていた内容が大事なことだと感じましたので記しておきます。

それは、歩平先生が亡くなられたあと、誰が後継者になってその遺志を継ぐのかということでした。その認識や御見聞だけでなく、日本語も直接理解できるという意味でその存在は大きかったとのことです。先生自身も、教科書編纂の作業や近代史研究所の内部に日本語ができる研究者が少ないことを心配されていました。

日本側としてもこの課題にきちんと向き合い、若い世代を育成していくことが、歴史問題を好転させていくための重要な取り組みになるのではないかと感じました。それが、歩平先生そして亡き中帰連の皆さんに安心して頂くことにも繋がると思います。

あらためまして、歩平先生の御冥福をお祈り申し上げます。

安川寿之輔さん記念館で講演

5 月 22 日の総会後の講演会では福沢諭吉の研究者である安川寿之輔さん（名古屋大学名誉教授）をお招きし「福沢諭吉の見直し～日本の『近代』と『戦後民主主義』の問い直し」と題して　　講演頂きました。安川さんは 81 歳の高齢にも関わらずお元気で 3 時間近く立ったまま講演され、当日は A4 、20 頁と補足資料 8 頁のレジュメ・資料を用意して下さいました。

（講演する安川先生）

安川さんは、『学問のすすめ』の冒頭で、福沢諭吉が「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という人間平等輪（天賦人権論）を主張した近代日本の「偉大な民主主義の先駆者」と評価きれてきた事実を真っ向から批判しています。福沢は「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云えり。」と伝聞態で書くことによって、自分は人間平等論に同意・同調していないという重要な事実を表明していたのに、丸山眞男をはじめほとんどの学者がそれを無視して来たことを問題にしています。事実、『学問のすすめ』は明治の人民が「自由や平等」に生きてはならないことを主張していると、安川さんは指摘しています。

福沢の「一身独立して一国独立する」の解釈の場合も、ほぼ 100%の学者が誤読して、福沢自身は「国のためには財を失ふのみならず、一命を抛（なげうち）て惜しむに足らない国家主義的な「報国の大義」を主張しているのに、明治前期の「健全なナショナリズム」の定式であると解釈してきました。福沢が戦前の日本人の精神を支配した「教育勅語」に積極的に賛同していた事実も、安川さんが初めて解明しました。

「独立自尊」という言葉の場合を含めて、すべて福沢自身の本来の意味・主張・思想とは無関係な誤読や勝手な「読みこみ」が行われてきました。このように福沢を誤読し、不当に美化して数々の「福沢諭吉神話」を創り上げてきた丸山眞男らの「戦後責任」は余りに重いというのが、安川さんの見解です。

福沢は「官国強兵」ではなく「強兵富国」のアジア侵略路線を推進し、近代日本人のアジア蔑視の「帝国」意識形成を先導した保守主義者でした。その福沢の思想と実像にふさわしく、現在の日本で福沢を最高にもてはやしているのが、（施政方針演説の冒頭に「一身独立して一国独立する」を引用した）安倍晋三首相を筆頭に、石原慎太郎、平沼赳夫ら「極右」の政治家たちであり、長年「福沢諭吉神話」＝「丸山諭吉神話」を信奉してきたジャーナリストたちも、一部では、ようやく目をさまし始めています。

福沢は、「人間世界に強弱智愚相匹敵（強弱智愚の違いない状態）して相親愛するの例

は殆ど絶無と云う可し。・・人間社会の小は一家族の内より大は公衆の交際朋友の間柄に至るまでも、人々の智愚か強弱いよいよ懸隔すれ（へだたれ）ば親愛の情を深くし、之に反するもの（平等な関係）は衝突を免れず・・男女の間を同権にするが如き、一切の平均論・・其平均は偶（たまた）ま以て衝突の媒介たる可きのみ」（『福翁百話』）と書いているように、人間を平等にしたら社会がうまく治らないという哲学まで主張した確信犯的な「帝国主義」的差別主義者であった。

わかりやすい福沢の教育制度にかかわる具体的な主張を紹介すると、この世で「最も恐るべきは貧にして智ある者なり」と表明して、その恐ろしい「貧智者」が生じないようにするために、福沢は、高等教育は「専ら富豪の子弟を教えるの門」にするように、生涯、持論的に主張した。

安川さんは、第二次大戦当時の徴兵制度についても、欧米に多く見られた「良心的兵役拒否」の事例を紹介し、同じ時代の日本との大きな違いを話された。また、日本の戦争責任意識の遅れとかかわり、日本軍性奴隷（従軍慰安婦）問題にも触れ、国旗・国歌については、同じ同盟国だったドイツ・イタリアが戦後「国旗・国歌」を改めているという重要な知識を、日本の大学生がほとんど知らないという、日本の平和教育の残念な現状なども話された。

その後、「福沢諭吉は日本の近代化の道のりをどう歪めてきたか」の中で、安川さんは下記の項目について詳しく解説された。

1．「米独立宣言」精神の『学問のすすめ』への歪曲「一国独立」最優先路線の帰結。
2．自由民権運動と福沢諭吉―神権天皇制とアジア侵略路線の確立。
3．アジア蔑視観による侵略の合理化―丸ごとの蔑視・偏見・マイナス評価。
4．大英帝国に比肩する帝国主義強国建設の未来像―日清戦争勝利は「日本の外交の序開き」に過ぎない。
5．「韓国併合」の可能性の予告―「満蒙は我が国の生命線」発言の先駆
6．日本人の「従順温良、卑屈、無気力」の国民性は「我日本国人の殊色」
7．権謀術数発言による国権拡張至上主義
8．「日本臣民の覚悟」の天皇制ナショナリズムの鼓吹と靖国神社構想
9．「圧制の長上に卑屈の軍人」の「皇軍」構想と日本軍性奴隷（慰安婦）問題
10.労働運動・社会主義運動への警鐘―「最も恐るべきは貧にして智ある者」
11.帝国主義による植民地獲得は「世界人のため」―大国主義的な軍備拡大要求
12.足尾銅山鉱毒事件と「北清事変」出兵―対照的な田中正造と福沢諭吉
13.能天気な福沢の人生総括―「洸（こう）として夢の如」し
14.「大逆事件」と慈善事業の勧め―福沢死後と「恩賜財団済生会」創設など多面に渡って講演された。

詳しくは下記の本などをご参照下さい。
『福沢諭吉の教育論と女性論』
『福沢諭吉の戦争論と天皇制論』
『福沢諭吉と丸山眞男』
『福沢諭吉のアジア認識』（何れも「高文研」）

なお現在、安川寿之輔、雁屋哲、杉田聡の3氏が『1万円札から福沢諭吉の引退を求める全国合同講演ツアー』を開始する予定（12月4日、明治大学ホール）で、その賛同者（現在約800名）を求めています。年会費1000円で『さようなら！福沢諭吉』（A5版約100頁）が年2回届きます。7月8日に「創刊号」が発行されました。

◆入会の申込み・振込先は下記の通りです。
郵便振込【００８００－４－７０８６１】
名義：安川寿之輔
◆ＦＡＸ［０５２－７８３－２２９１］

第15回中帰連に学ぶ会
「責任の歴史学とは何か」（要旨）

講師：松村髙夫･理事長

フクシマ３・１１により人類は「緩慢な大量虐殺」の時代に本格的に入った。と同時に経済学、歴史学などの社会科学、物理学などの自然科学もその有効性を失い、諸々の学問研究は崩壊したと捉えている。

理性を駆使しての近代科学の営みが「一種の新しい野蛮状態」を何故生み出していくのか。

経済学において最初に学ぶ需要曲線と供給曲線の交点である「均衡」概念に、問題が潜んでいる。そして歴史学においても同様で敗者は痕跡をとどめることなく消えてしまう。

歴史学におけるＥ・Ｈカーと Ｉ・バーリンの論争において、カーは歴史を貫く一般法則を明らかにするのが科学としての歴史であるとしたが、バーリンは、生じた事を辿っていく事後的後述は勝者の歴史になると批判。またカーの法則的把握は個々の人間の主体的行動も責任を問わないことになるとも。この論争は現在に至るも未だ決着がついていない。

少しさかのぼると、近代合理主義の始祖の一人デカルトに対して、歴史的人間主義を唱えて敢然と挑戦したのがイタリアのヴィーコ。個人的理性感覚（我惟う、故に我在り）を中心にしたのがデカルトだが、ヴィーコは共通感覚（コモンセンス）・ファンタジアを説く。

デカルトに端を発する近代合理主義が理性を駆使し「知識」を拡大し、近代科学を発展させ、ついに原子力まで作り出した。この流れを根源的に批判しうるのは、ヴィーコから出発し、Ｗ・ブレイク→Ｗ・モリス→Ｅ・Ｐトムソンに行く、歴史的人間主義、「知恵」の流れである。

誤解を恐れずに単純化して言えば、危機感を持たない専門の歴史家や経済学者たちの著作や講演などに対して、これ以上全面的に依存してはならない。代わって一人ひとりの市民が歴史家、経済学者にならなければ、再び欺されてしまう。（詳細は同封「資料」をご参照下さい）

（「中帰連に学ぶ会」参加の皆さん）

「中国友誼促進会」の皆さんが来館

北京の「中国友誼促進会」の陳少信副秘書長を含めた 5 人の皆さんが 7 月 26 日に来館され、理事らと交流しました。友誼促進会とは「諸外国 との民間友好交流の促進を担当する社会団体」です。

当日は松村髙夫理事長が所要で参加できず、最初に姫田光義館長から歓迎挨拶の後、代表の陳副秘書長からご挨拶を受けました。

皆さんは日本は初めてとのことでしたが「中帰連、受け継ぐ会、記念館の皆様とお会いできて光栄です。短い時間ですが、皆様とゆっくり時間を過ごしたい」と挨拶されました。以下、ご挨拶の概要です。

“皆さんは年齢をとってもこのような努力をしている。中日友好事業に取り組んでいる。

革命者は若く見える、という言葉が中国にはある。皆様も若く見える。

平和、協力、友情の深化、といった夢を追求し、次の世代につなげたいと思う。日本に来て、ここに来て、皆様の精神を理解できた。感服している。

皆様の中には中国を訪問された方も多いと思う。ここに来て本当の事情がわかった。皆様の精神が多くの人に伝わるように努力したいと思う。

友促会も友情を深めるために組織された。皆様と同じ精神で、友情と平和の追求は国境

を越えると思う。

昨日は中国大使館を訪ね、平和記念館についても話し合った。皆様がとても元気でいらっしゃることを喜んでいる。記念館、中帰連のためになることをやりたい。友促会の名前でそう誓いたい。

8 月 28 日に瀋陽でシンポを実施する。皆様の参加を期待する。皆様の精神を知らせるために企画した。来訪を楽しみにしている。皆様との相互訪問、共同作業を通じて日中の友好関係を出来るだけ深化させたい。

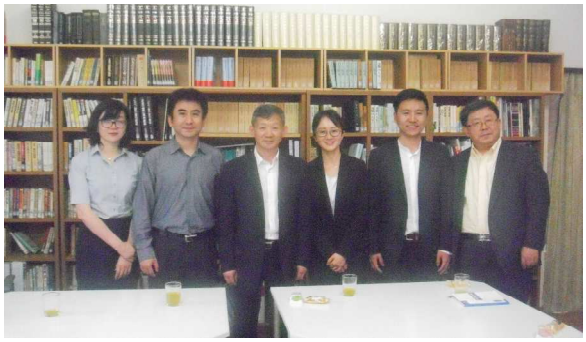
皆様と協力を続けていきたい。若い人達につなぐために何か出来ると思う。

私は当会で国際交流を担当している。民間交流のあり方を考えている。ここで改めて誓う。友促会を代表して出来るだけ皆様のお役に立ちたいと思う。

皆様、これからは家族のようにつきあって行こう。困ったことがあれば連絡して欲しい。意見要望があれば伝えて欲しい。これからも協力していきましょう”

その後、理事らの自己紹介に続いて友誼促進会の皆様の自己紹介を受け、交流を続けました。陳副秘書長は元中帰連事務局長の髙橋哲郎さんの体調を心配され、芹沢事務局長からは「記念館」の経過や近況報告がありました。また昨年、北京のシンポに参加した石田理事や兒嶋理事からは自身の担当の報告や、橋本理事や吉澤理事、明治学院大の張宏波さん、記念館司書の宮本直子さん、「受け継ぐ会」本部の長沼さんなどからも報告などがありました。

友誼促進会の皆様は本当に真摯な姿勢で、これからも力を合わせて協力し理解を深めようと確認し、何でも相談して下さいとのことでした。そして、今年も瀋陽で開催される「シンポ」でので再会も楽しみにしていますと、予定時刻を少し越えて 16 時前に東京に戻られました。今後も協力・交流を深めることを合意しました。



（中国「友誼促進会」の皆様
左から三人目が団長の陳福秘書長）

「撫順戦犯管理所の皆さんが来館」

撫順戦犯管理所の孫傑所長（館長）一行 6 名が 6 月 24 日に来館しました。前日には新宿で「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」主催の歓迎会が開かれ、記念館や「再生の大地合唱団」の皆さんも参加しました。

記念館での交流では孫所長からは「リニューアルを予定しているので展示を拡充したい。特に中帰連の関係者が日本に帰ってからどのように活動し生きたかを展示したい」との要望があり、記念館も出来る範囲で協力する旨伝えました。

また，孫所長からは『季刊中帰連』は大切に保管し、その内容を中国人に知らせる努力もしている。管理所だけでなく、中帰連を知らせる努力もしている。管理所での史実に関して記念館で必要な資料があれば協力可能との事でした。

管理所としては研究者に協力してもらって、中国の管理所について研究し世界に知らせたい。中国人が平和を愛する確かな証拠であり、南京記念館、七三一記念館、9.18 記念館、平頂山記念館等とも連携しているとのことでした。

これに対し松村理事長からは次のように応じました。「一番希望することは資料の公開である。管理所での供述書は瀋陽の裁判の 45 人に関しては当館でも(データの形で)受け取っているが、他の関係者や太原の関係者等については、一部近年中国で公開され始めたが大半は未公開である。これを公開していただければかつて日本側が何をしていたのかがよくわかると思う」。これについて孫所長は「上級の部署に連絡してみる」との事でした。

兒嶋理事からは、「寛大政策」を決定した周恩来や毛沢東に関する資料の公開を希望す

る。これが明らかになれば当時の判断の背景もよくわかると思うと」の意見が出されました。更に松村理事長から「管理所の役割や寛大政策については、私たち、つまり記念館と管理所の間では共通の理解があるが、日本国内では逆風が吹いている。外交史学会や国際関係学会では、対日策略の一環だ、というような見方が打ち出されている。兒嶋理事の要望は、資料が明らかになればこのような逆風に対抗できるということです」との意見も伝えられました。

これに対し、管理所側からは「寛大政策の正しさは証明されているが、事実にもとづいたものを中国、日本、世界に理解してもらう必要がある」と表明されました。

橋本理事らは「管理所をユネスコの記憶遺産にしようというアイディアが姫田館長から出されている。受け継ぐ会と中国側と共同でということだったと思う。また長春やロシアでパネル展示をやって大変好評だったときいているが、日本でも出来るかもしれない。どのような内容だったか」の質問には、要望を預かりまた。連絡いたします」との事でした。

短い時間でしたが、有意義な交流ができました。

（孫所長と同行の皆さんとの「懇談会」）

2016年度 総 会 報 告

記念館では5月22日（日）に2016年度総会を開きました。松村理事長の挨拶の後、議長に埼玉の星野さん、記録に兒嶋さん、議事録署名に長坂さん、芹沢さんを選出し議事に入りました。

１.「報告事項」

最初に芹沢事務局長から1年間の活動報告（同封別紙）があり、松村理事長などからは昨年9月に北京で開催され、松村理事長、石田理事、兒嶋理事などが参加した「日中関係シンポジウム」や、北京の「中国友誼促進会」とも交流してきたとの報告がありました。また今年8月の同シンポにも参加予定です。

その後、「受け継ぐ会」事務局長の荒川さんから、「受け継ぐ会」と『季刊 中帰連』の報告があり、次の61号には『記念館10周年特集』を組みたいとのことでした。

２.「検討事項」

続いて「検討事項」に入りウエスタ川越で11月13日（日）に『記念館10周年集会』を開催することを決め、内容を検討しました。

むのたけじ名誉顧問の講演（その後ご逝去）や元中帰連の上坪鉄一氏のご遺族の伊東秀子弁護士（元衆議院議員）の講演やシンポジウムなどの提案を検討し、今後「理事会」などで詰めていくことになりました。

もう一つの「検討事項」として、今まで記念館では特に「展示」をしていませんでしたが、地図や年表など含め展示を実現するよう、今井理事を中心に検討して行く事になりました。

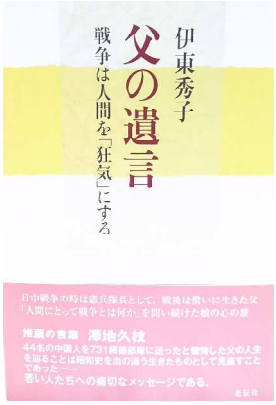
３.「承認事項」

承認事項として監事からの「会計監査報告」（同封）の内容が承認されました。次に理事の変更が提案され、辻耕理事の退任要請が承認され、新たに細川清和さん（元「大林組」理事）と伊香俊哉さん（都留文科大学教授）のお二人が新たに理事に承認されました。

中国中央テレビ（CCTV）が来館

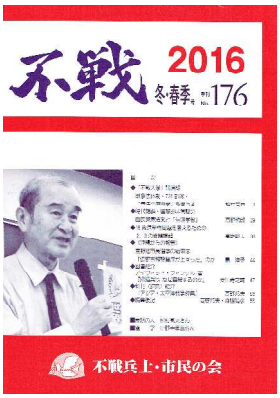
6月3日、中国中央テレビが来館し、松村理事長、芹沢事務局長が対応し、取材班は館内資料の撮影や松村理事長のインタビューなどを収録しました。

寄贈された書籍から



著者：伊東秀子
出版：花伝社
　元中帰連会員で憲兵隊長だった上坪鉄一氏のご遺族（元衆議院議員・弁護士）が父の事を含め日中戦争を記した貴重な本です。

著者：上丸洋一
出版：朝日新聞
　朝日新聞に連載された同名の連載記事を纏めた本です。著者の上丸・編集委員は「中帰連」にも関心を持ち過去にも記事を書いています。



「不戦兵士･市民の会」の季刊誌です。巻頭に「不戦大学」での松村理事長（表紙）の講演記録「戦争法制・731部隊・『責任の歴史学を考える』」が載っています。

『記念館10周年集会』予告

日時：2016 年 11 月 13 日（日）
場所：「ウエスタ川越」049-249-3777
　　（ＪＲ・東上線「川越駅」西口徒歩 5 分）
テーマ：『いま 戦争と平和を考える』
※　同封「チラシ」をご参照下さい。

『訂正とお詫び』

　前号で玖村敦彦さんの『かえりみる日本の近代史とその負の遺産』をご紹介しましたが、著者のお名前を間違え、また玖村さんが「著作権を放棄」と書きましたが、「この本で儲けることなどしたくない」と「版権を放棄した」の間違いで、お詫びして訂正させて戴きます。
　また、前号に同封させて戴いた「振込用紙」の一部にＡＴＭが受け付けない用紙があり大変ご不便とご迷惑をお掛けし済みませんでした。

「コピー機を入れ替えました」

　事務所のコピー機は 10 年以上使っており、最近「キーキー」と異音が出たり紙込みも多く、スピードも遅いので 5 年リースで入れ替えました。今までは白黒のコピーだけでしたが、今度はカラーコピーができ、印刷やスキャンもでき、ファックスも使えパソコンとも wife で繋がり便利に使えます。
　記念館は一切の「公的補助」は受けておらず、皆様からの会費とカンパのみで運営しており、皆様のご理解とご支援に感謝致し、大切に使わせて戴きます。
　今後ともご理解ご支援のほど宜しくお願い致します。

『NPO・中帰連平和記念館』

〒 350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6
TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＭＬ：npo-kinenkan@freeml.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
郵便振込口座名「NPO・中帰連平和記念館」
振込口座　：００１５０－６－３１５９１８
開館日：「水、土、日」（10:30 ～ 16:30）
　　（なるべく事前にご連絡下さい）